

外国につながる子どもにとっての子ども食堂

—外国籍の子どもが多い地域における子ども食堂が担う役割—

国井 理央

論文要旨

本稿は、愛知県知立市内の2つのフードパントリーの活動を通じて、コロナ禍での活動の状況を明らかにする。また、支援を受ける子どもと支援をする大人から聞き取りをすることで、子ども食堂が外国につながる子どもたちに向けてできる活動とこれからの課題を確認する。

第一章では、日本国内における外国につながる子どもへの教育とキャリアについて先行研究を中心にその概要をまとめた。そこで、高校進学が壁になっており、子どもたちの様々なキャリアの選択肢を広げることが重要だと分かった。第二章では、愛知県知立市の子ども食堂、ちりゅっ子かふえの活動についてまとめ、知立団地のフードパントリーで協力していただいている任意団体 One day One life の紹介をした。第三章では、西町公民館のフードパントリーと知立団地のフードパントリーでの活動の様子をまとめ、それぞれの違いを明らかにした。その結果、西町公民館のフードパントリーは食の支援としての役割よりもイベントや楽しむために行くという要素が強く、知立団地のフードパントリーは食の支援の役割が強い。第四章では、知立団地のフードパントリーと西町公民館のフードパントリーでそれぞれ参加した子どもを対象にアンケートを行った結果を分析した。その結果、まず参加人数は知立団地に暮らす外国につながる児童の約20%ほどであり、フードパントリー開催の情報は周りの大人を通じて子どもに伝わっている。また、日本の食文化に慣れており、アレルギー以外で食べられないものは無いことが分かった。第五章では知立団地にある任意団体 One day One life 代表のミウラクミコさんに、第六章ではちりゅっ子かふえの運営スタッフの3名にインタビューを行った。クミコさんには第五章でのアンケート結果が正しいことを確認し、知立団地の子どもたちに必要なのは第一に教育であるという話を聞いた。ちりゅっ子かふえの運営スタッフからは、ちりゅっ子かふえの成り立ちと、「みんなで温かいご飯を食べる日を作りたい」という目的であること、フードパントリーであっても子どもたちが喜んでくれるなら嬉しいが、子ども食堂の形に戻したいと思うという話を聞いた。また、知立団地のフードパントリーも、外国につながる子どもを対象を限定していると思っていたがそうではなく、誰にでも来てほしいと考えているようだ。終章では、子ども食堂の活動が活発になっているが、草の根活動では限界があることを挙げた。そしてボランティアとしてではなく、日本社会が子どもへの支援に関心を持つことが必要であるということをもとめとした。

序章 外国につながる子どもにとっての子ども食堂

本稿は、外国につながる子どもたちは子ども食堂をどのように捉えており、どのような役割を持つのかについて、愛知県知立市内の2つのフードパントリーから考察する。

2020年2月より新型コロナウイルス感染症が日本国内でも広がり始め、子ども食堂は活動の見直しを余儀なくされた。厚生労働省の調査によると、全国 2021年1月時点で活動

を休止している子ども食堂は25.5%である。また、活動している子ども食堂の活動内容を見ると「フードパントリー・弁当配布への切り替え」が最も多く61.2%、「手指の消毒等の感染防止対策を実施した上で通常開催」が次いで37.8%、「参加人数の制限」が27.7%であった。

子どもたちに活動場所で食事の場も提供する活動がコロナ禍前から続く従来の子ども食堂の形であるのに対し、コロナ禍により新たな活動の形も増えた。それがフードパントリーや弁当配布である。フードパントリーとは、食品を無料で提供する活動のことであり、賞味期限の近い食品などフードロスを減らす取り組みとしても注目されている。

子ども食堂やフードパントリーが広がりを見せる中で、その対象は様々である。対象者の制限をせず、すべての子どもたちが来れるところ、家庭の経済状況によって独自の基準を設け対象者を制限しているところ、年齢によって基準を設け対象者を制限しているところなどがある。しかし、対象者に「外国籍の子ども」を定めているところは少ないと感じる。愛知県は出入国在留管理庁の調査によると2020年12月現在、東京都に次いで273,784人と2番目に在留外国人が多い町である。

在留外国人がこの地域に集中するのは、大手自動車メーカーの本社があり、自動車関連企業の集積地になっていることが主な理由だ。在留外国人は、その工場をはじめ下請けの企業、またさらに下請けの企業の単純労働従事者として雇用されることが多い。日本で暮らすブラジル人の増加の歴史は、1980年代のブラジルでの出稼ぎブームから始まる。80年代はブラジル国内でも出稼ぎには否定的な意見も多かった。しかしブラジル国内は経済が混乱しており、日本とブラジルでは賃金格差が10倍もあった。一方日本では80年代半ばから無資格就労者の外国人が多く、かつ単純労働者が不足していた。そこで、出入国管理及び難民認定法を改正し、3世までの日系人は定住できるようにした。つまり、無資格就労者であった3世までの日系人が、合法的に日本に長期に滞在し自由に就労できるようになった。このように、お金を稼ぎたいブラジル人と労働力が欲しい日本、両者の利益が一致したこともあり、日本で単純労働に就き定住するブラジル人が増加した。しかし雇用条件は良いとは言えない。企業は景気の良い時は多くの外国人労働者を雇用するが、景気が悪くなると真っ先に打ち切られるのも外国人労働者だからだ。外国人労働者が企業の調整弁になっているのが現状であり、外国人労働者の就労と収入は不安定である。

また、外国人労働者の人数は、過去5年間を見ると2019年から2020年はコロナ禍の影響もあってか減少した。しかし2016年から2019年まで増加し続けており、コロナ禍後も増加することが予想される。このように愛知県には在留外国人が多いにもかかわらず、その子どもたちを対象にした子ども食堂が少ないことは、愛知県内の子ども支援の課題だと感じた。そして、子ども食堂やフードパントリーが外国につながる子どもたちを対象にするためにはどのような取り組みが必要であるのか。また、愛知県の中で多文化共生を考えた際に、外国につながる子どもたちも日本人の子どもたちも通いやすい子ども食堂を作る方法について興味を持った。今回は、愛知県知立市で行われている規模も対象者も違う2つのフードパントリーから、活動の対象者についてと外国籍の子どもたちを対象にすることについての現状や課題を考察する。なお、本稿では弁当配布の活動もフードパントリーとして扱う。

第一章 日本における「外国につながる子ども」への支援の現状

現在、「外国につながる子ども」という表現が使われる場面も増えており、本稿でも「外

国につながる子ども」という表現を使用している。外国につながる子どもとは、『国籍を問わず、文化的言語的に多様な背景を持つ子ども』（2021, 小島）のことだ。外国人の子どもと言っても、ただ単に外国籍の子どもとひとくくりにできるわけではなく、外国籍であっても生まれてからずっと日本で生活している子や、日本国籍でも外国にルーツにある、あるいは、外国で生活していた子、日本での生活が長い日系3世・4世の子など、文化や言語の背景が多様化している。こうした子どもを表現するための言葉は存在しないため、「外国につながる子ども」として表現されている。他にも、海外につながる子ども、外国にルーツを持つ子ども、外国由来の子どもといった呼び方もあり、表現は統一されていない。

そしてその外国につながる子どもは増加し続けている。法務省の在留外国人統計から0歳～14歳までの人数をまとめると、1989年から2019年の30年間で約9万人増加している。今後も増加し続けられることが予想される外国につながる子どもが日本で生活していくためには、高校進学への支援とキャリア教育が重要である。

第1節 外国につながる子どもの高校進学

外国につながる子どもにとって高校進学は大きな壁となっている。2015年時点で15歳～17歳の外国人総数に対する高校在籍率は40%台とかなり低い。その理由は、外国からの来日者で高校受験の条件を満たしていないことや、国籍の国に帰国を予定しているため高校にはいかない、日本語に困難があり進学をあきらめる、入学しても中退してしまうといった事情による。しかし、それ以外にも子どもたちだけではなく保護者や学校の先生の情報不足で、支援者が情報提供したくてもその受け皿がないことも原因として考えられる。日本に定住する場合、高校進学することが自立した生活を送るために必要であるため、高校進学の必要性を説明し理解してもらうことが大切である。

高校進学に関する情報を外国につながる子どもとその保護者に知ってもらうために、神奈川県では1995年に全国で初めて高校進学ガイダンスを実施し、現在も継続している。ガイダンスでは材検外国人等特別募集で受験をする子ども、一般募集・海外帰国生徒特別募集で受験をする子どもに分かれ、高校入試の説明や受験できる高校の紹介、先輩の体験談を交えて行っている。その結果、神奈川県では県や市町村の教育委員会との連携が強まり、高校進学ガイドブックの作成も始まった。また、地域に100以上ある外国につながる子ども向けの日本語学習支援教室とのネットワークも構築され、外国につながる子どもを取りこぼさない対応を作り上げている。

第2節 外国につながる子どものキャリア教育

そしてキャリア教育について、外国につながる子どもは進路を描きづらいという現状がある。その理由として、日本語の不自由や文化の違いから学校で友達ができずに孤立してしまうことや、保護者の日本語能力や保護者との関係性などにより身近に相談できる大人がいなことが挙げられる。その状況を打破するために、キャリア教育と居場所作りを連動させて実施することがある。その際のポイントは3つある。1つ目は、子どもが「ここにいてよい」と思える安心安全の場を作ることだ。そのためには、子どもに自分の役割を作り、1つのイベントや目標に向けて協力する場を設けると良い。2つ目は、同じく外国につながる大学生や社会人などのロールモデルとの出会いの場を作ることだ。ロールモデルと交流することでどのような進路の選択肢があるのかを知ることができ、自分自身の将来を想像しやすくなる

と共に、身近に相談しやすい先輩ができる。3つ目は進路に向けて行動する場を作ることだ。居場所の仲間と共に大学や専門学校のオープンキャンパスに訪問することで、居場所が将来に向けて行動するきっかけになる。

このように義務教育を終えた後の進路の選択肢を紹介し、様々な交流の機会を作り、目標の進路に向けて支援をすることが、外国につながる子どもたちが日本で自立した生活を送るうえで重要になる。

第二章 ちりゅっ子かふえの誕生

今回「外国につながる子どもたちを対象にした子ども食堂」をテーマとして調査するにあたって、調査対象は次の団体にご協力いただく。愛知県知立市で活動する「ちりゅっ子かふえ magocoro（以下ちりゅっ子かふえ）」が知立神社で行う地域の子どもたち全員を対象としたフードパントリー・弁当配布と、同じくちりゅっ子かふえが知立団地内の「任意団体 One day One life（以下 One day One life）」と協力しておこなう、外国につながる子どもが多く来るフードパントリーだ。

ここで、ちりゅっ子かふえと One day One life について紹介する。ちりゅっ子かふえは2018年に知立市内の女性4人で設立し、2019年5月18日に第1回子ども食堂ちりゅっ子かふえを開催した。月に1度のペースで開催し、公民館での食事の提供や体験教室、ビンゴ大会なども行っていた。コロナ禍の2020年3月からはフードパントリーと手作り弁当の配布を状況に合わせて月に1度続けている。フードパントリーは子ども100人、大人50人ほどが利用しており、規模が大きい活動だと言える。そして、One day One life は知立団地にある合同会社スタートアイズの任意団体だ。スタートアイズは主に外国人就労支援を行う会社である。知立団地には外国人労働者が多く、就労についてだけではなく現在では新型コロナウイルスのワクチン接種予約のサポートや子どもたちへの支援などを行い、地域の外国人から頼りにされている。このスタートアイズと One day One life の代表であるミウラクミコさんから、ちりゅっ子かふえが場所をお借りしておこなっているのが外国につながる子どもたちを対象としたフードパントリーである。このフードパントリーは2021年5月23日に第1回を開催し、月に1度程度継続して開催している。利用人数は子ども25人前後と規模が小さい活動と言える。また、明確に対象者を限定して利用者を募集しているわけではないが、「外国人の多く住む知立団地内の外国人を対象にした会社の前」という場所の性質上、「外国につながる子どもたち」という対象に限定されていると感じる。

今回の調査は、①知立団地でのちりゅっ子かふえを利用する外国につながる小学生から高校生までの子どもたちへのアンケート調査、② One day One life のスタッフの方々への聞き取り調査、③ちりゅっ子かふえ運営の栗田さん・渡辺さん・福井さんへの聞き取り調査の3点から考察する。子どもたちへのアンケート調査では、次の内容を質問する。1つ目は、今まで開催した知立団地でのちりゅっ子かふえに参加したことがあるかだ。継続した支援ができていのかを調査するためにこの質問を設けた。2つ目は、ちりゅっ子かふえの活動をどこで知ったのかだ。対象者を限定するためには、情報発信の時点で選別する必要があると考えた。そのため、どのように情報を発信すると来てほしい子どもに来てもらえるのか分かると思い質問を設けた。3つ目は、普段の食文化についてだ。文化の違う子どもたちに日本の食を提供してよいのかという疑問があったため、提供できるもの、注意すべきものを明

確にしたい。具体的には、学校での給食はどうしているのか、また、第1回・第2回で配布した食品は全て食べることができたかを聞いて判断したい。なお、本稿では参加するほとんどが日本人の子どもである対象者を選ばない「非選別型」のフードパントリーを、その開催場所の名称から「西町公民館のフードパントリー」、外国につながる子ども向けのフードパントリーを「知立団地のフードパントリー」と呼び分ける。

第三章 西町公民館のフードパントリーと知立団地のフードパントリーの活動実態

調査対象の2つのフードパントリーがどのような活動を行っているのか、実際に参加したレポートをもとに比較する。

第1節 西町公民館のフードパントリー

まずは、西町公民館のフードパントリーについては以下の通りである。(表1)

【表1】西町公民館のフードパントリー概要

開催場所	西町公民館
日時	月に一度、不定期で土曜か日曜の11:30～12:00
対象者	子どもは幼児から高校生と、その保護者
料金	子ども無料、大人200円
スタッフ	地域のボランティア(大人10人ほど、学生6人ほど)
配っているもの	子ども:弁当、まごころバッグ、日によってバルーンやくじ引き 大人:弁当(1つ200円)、大人向けのお菓子や飲み物

こちらは主に幼児から小学生の子どもが多く、既述のとおり子どもが100人来る規模の大きいフードパントリーだ。来ているのはほとんどが日本人の子どもたちで、外国人の子どもはあまり来ない印象だ。配布しているのは寄付でいただいたお菓子やジュース、お米2合分などの食材が基本だ。これらのものをまごころバッグと呼ばれる紙袋に入れて子どもに渡す。季節によってはヨーヨー釣りがあったりクリスマスコンサートを開いたり、おもちゃくじやバルーンアートがあったりと、子どもたちが楽しめるイベントとしての活動が多い。(図1)用意する食品セットが多く、すべてのセットを平等に入れなければならないため、端数で余ってしまった食品はボランティアで持ち帰ったり、賞味期限の長いものは知立団地での外国籍の子どもたちへのフードパントリーに回したりと工夫が必要だ。また、ボランティアは平均15人から20人ほどであり、地域の主婦の方が多く活動している。2021年の夏ごろからは中学生ボランティアの参加も増えた。当日は開始時間前から多くの子どもたちと保護者が集まり始め、開始前に並ぶようアナウンスをすることが多い。30分間の活動時間を設けているが、利用者のほとんどが開始時間前から並んでおり、後半はほとんど配り終えた状態で残り時間を待つ状態になる。また、利用者同士や知り合いのボランティアと話をしている利用者もあり、にぎやかな活動になっている。



図1 用意したヨーヨー釣り

第2節 知立団地のフードパントリー

続いて知立団地のフードパントリーについてである。(表2)

【表2】 知立団地のフードパントリー

開催場所	知立団地 任意団体 One day One life 事務所前
日時	1～2月に一度、不定期で土曜か日曜の11:00～12:00
対象者	子どもを中心に誰でも
料金	無料
スタッフ	ちりゅっ子かふえのスタッフ4人とスタートアイズのスタッフ2人
配っているもの	お菓子、調味料、レトルト食品、お米など寄付で貰ったもの



図2 (左) まごころバッグとお米



図3 (右) まごころバッグの中身

こちらも幼児から小学生の子どもが多いが、子どもが20人ほどと規模の小さいフードパントリーと言える。来ているのは全員外国につながる子どもたちで、日本人の子どもはいなかった。配布しているのは寄付でいただいたお菓子やジュース、お米などの食材が基本だが、お米は1世帯3kgと多いことや、パスタソース・レトルト食品など食事系が充実しているこ

とが違いとして挙げられる。(図2, 3) 用意する食品セットは少なく、食品を余すことなく配りきることができた。またボランティアは、第1回は運営者の2人、第2回は運営者の2人と学生ボランティア2人の計4人と少ない人数で開催している。開始時間前から待っている子どもは少なく、同じく30分間の活動時間の中でコンスタントに利用者が来ている。クミコさんに直接連絡をしてから取りに来る人もおり、活動時間終了後に連絡が来て急遽食品セットを作り渡したこともあった。他にもクミコさんのFacebookを見て来たという子どもも多くいた。そのため、すでに地域の外国人家族とつながりがあるクミコさんがいたからこそ、今回の知立団地でのちりゅっ子かふえが開催できたのではないかと考える。

これらのことから、西町公民館のフードパントリーは食の支援としての役割よりもイベントや楽しむために行くという要素が強く、知立団地のフードパントリーは食の支援の役割が強いのではないかと感じた。

第3節 ちりゅっ子かふえの活動歴

ちりゅっ子かふえの立ち上げから現在までの活動歴は以下の通りだ。(表3)

【表3】ちりゅっ子かふえの活動歴

日時	活動場所	活動内容
2019年1月27日	知立リリオコンサートホール 会議室	子ども食堂はじめの一步 三河地区勉強会
3月28日 11時半～13時半	西町公民館	お披露目会
5月18日 11時半～13時半	西町公民館	第1回ちりゅっ子かふえ
6月2日 10時半～12時	ヴィラトピア知立 談話室	第2回ちりゅっ子かふえ
7月27日 14時半～16時	西町公民館	第3回ちりゅっ子かふえ
8月29日 11時半～14時	西町公民館	第4回ちりゅっ子かふえ
10月6日 10時半～12時	ヴィラトピア知立 談話室	第5回ちりゅっ子かふえ
11月30日 11時半～14時	西町公民館	第6回ちりゅっ子かふえ
2020年1月18日 11時半～14時半	西町公民館	第7回ちりゅっ子かふえ
2月2日 10時半～12時	ヴィラトピア知立 談話室	第8回ちりゅっ子かふえ(コロナ禍前最後の開催)
3月18日		3月26日と4月4日のちりゅっ子かふえ中止のお知らせ
3月26日 11時半～12時半	西町公民館	第1回フードパントリー(お菓子などの配布)
4月19日 11時～11時半	知立神社 養正館	第2回フードパントリー
5月16日 11時半～12時	知立神社 養正館	第3回フードパントリー
5月30日 11時半～12時	知立神社 養正館	第4回フードパントリー
6月7日 11時半～12時	知立神社 養正館	第5回フードパントリー
7月26日 11時～11時半	西町公民館	第6回フードパントリー

8月30日11時半～12時	西町公民館	第7回フードパントリー
9月26日11時半～12時	西町公民館	第8回フードパントリー (炊き出し用ご飯のため、炊いた状態で配った)
10月18日11時半～12時	西町公民館	第9回フードパントリー (今回も炊いた状態で配った)
11月29日11時半～12時	西町公民館	第10回フードパントリー (手作り弁当配布を開始)
12月20日14時半～15時	西町公民館	第11回フードパントリー (「一般社団法人 100万人のクラシックライブ」のクラシックライブ開催)
2021年1月16日11時半～12時	西町公民館	第12回フードパントリー
2月14日11時半～12時	西町公民館	第13回フードパントリー
3月25日11時半～12時	西町公民館	第14回フードパントリー
4月18日11時半～12時	西町公民館	第15回フードパントリー
5月23日11時～12時	知立団地	第1回フードパントリー
5月29日11時半～12時	知立神社 休憩室	第16回フードパントリー (緊急事態宣言発令により手作り弁当は中止)
6月20日11時半～12時	知立神社 養正館	第17回フードパントリー
7月4日12時～12時半	知立団地	第2回フードパントリー
7月29日11時半～12時	西町公民館	第18回フードパントリー (手作り弁当配布再開)
8月22日11時～12時	知立団地	第3回フードパントリー
8月26日11時半～12時	西町公民館	第19回フードパントリー (緊急事態宣言要請により手作り弁当中止)
9月26日11時半～12時	西町公民館	第20回フードパントリー
10月9日11時～12時	知立団地	第4回フードパントリー
10月16日11時半～12時	西町公民館	第21回フードパントリー
10月31日10時～15時	知立南小学校	防災イベント参加
11月14日11時半～12時半	知立団地	第5回フードパントリー
11月21日11時半～12時	西町公民館	第22回フードパントリー (手作り弁当再開)
12月5日14時～15時	知立団地	第6回フードパントリー
12月19日11時半～12時	西町公民館	第23回フードパントリー
2022年1月23日11時半～12時半	知立団地	第7回フードパントリー
1月29日11時半～12時	西町公民館	第24回フードパントリー

コロナ禍前のちりゅっ子かふえは、2つの会場で交互に行っていた。1つ目は現在開催している西町公民館、2つ目はヴィラトピア知立という特別養護老人ホームが同施設で開催するヴィラマルシェだ。西町公民館のほうが利用人数が多く、レクリエーションも多くおこなわれていた。ヴィラマルシェでは、マルシェに来た大人の利用者も多く、レクリエーションの開催はおこなっていなかった。また、提供していた食事はどちらもワンプレートが多く、料金は幼児から中学生は無料、それ以上の大人は300円であった。(図4)

コロナ禍になり、手作り弁当を用意するようになって、基本的にはワンプレートの容器を使っている。(図5) 衛生面への配慮として、全員のマスクの着用に加え、調理を担当するスタッフ全員が三角巾とニトリル手袋を着用している。また、まごころバッグにはお菓子が多く入っている。(図6)



図4 西町公民館のちりゅっ子かふえで提供した食事



図5 (左) 手作り弁当を作る様子



図6 (上) まごころバッグの中身

第四章 ちりゅっ子かふえに来る子どもへのアンケート

3章で記述した調査方法で、知立団地では4回、西町公民館では1回アンケートを行った。まずは知立団地のフードパントリーでのアンケートを考察する。

第1節 知立団地のフードパントリーでのアンケート

第1回（調査数25人）

質問1 ちりゅっ子かふえをなにで知りましたか？

おとうさん・おかあさんから	12
くみこさん	9
知らなかった	3
そのた	1
総計	25

おとうさん・おかあさんからが最も多く12人、次いでクミコさんからが9人という結果になった。クミコさんからと答えた子はクミコさんのFacebookを見たという子が多く、おとうさん・おかあさんからと答えた子どもも、その親にたずねたところ、クミコさんのFacebookを見たと言う親が多かった。また、開催していることを知らず、偶然会場近くに来たところちりゅっ子かふえをやっていたので貰いに来たという子もいた。

質問2 ちりゅっ子かふえに来るのは何回目ですか？

1回目	13
2回目	8
3回目	4
総計	25

知立団地でのちりゅっ子かふえの開催は3回目である。1回目の子が最も多く13人、次いで2回目が8人、3回目が4人という結果になった。

質問3 前回もらった食べものはぜんぶ食べられましたか？

質問2で2回目か3回目と答えた子に聞いたところ、12人全員が全て食べられたと答えた。

質問4 学校の給食で食べられないものはありますか？

ない	13
ある	9
ブラジルの学校や幼稚園	3
総計	25

「ない」と答えた子が13人、ブラジルの学校や幼稚園に行っているためお弁当だと答えた子が3人、あると答えた子が9人という結果になった。しかし、宗教上の理由や文化の理由ではなく、9人全員がアレルギーのため食べられないということであった。

第2回（調査数26人）

質問1 ちりゅっ子かふえに来るのは何回目ですか？

1回目	15
2回目	4
3回目	2
4回目	1
5回目	1
6回目	2
無効	1
総計	26

知立団地でのちりゅっ子かふえの開催は4回目であるが、ちりゅっ子かふえ以外でも食料配布をしていたことがあるため、5回目以上と答えた子もいる。1回目の子が最も多く15人、次いで2回目が4人と続く。

質問2 友達にちりゅっ子かふえをすすめたいですか？

23人がはいと答え、無効票が1つあった。2人から「紹介しなくてもみんな知ってる」という回答もあった。

第3回（調査数20人）

質問1 ちりゅっ子かふえに来るのは何回目ですか？

1回目	12
2回目	4
3回目	3
4回目	1
総計	20

知立団地でのちりゅっ子かふえの開催は5回目で、1回目の子が最も多く12人、次いで2回目が4人であった。また、ちりゅっ子かふえに全て参加したことになる5回目という子はいなかった。

質問2 ふだんの食事できをつけていることはありますか？

18人がないと答え、2人はアレルギーがある（それぞれタマゴとエビ）と答えた。ベジタリアンやヴィーガンに代表されるような、思想による食事の制限があるかどうかについて聞くことがこの質問の趣旨であったため、選択肢は他にも「やさい・たまご・ぎゅうにゅうを

食べる」「やさいだけを食べる」の2つも用意していたが、その2つを選ぶ子はいなかった。

質問3 ちりゅっ子かふえに来るときの「きもち」に○をつけてください。いくつ○をつけてもよいです。

たのしい	19
かなしい	0
いやだ	0
あんしん	2
つまらない	0
きんちょう	1
うれしい	6
しんばい	1

「たのしい」が最も多く20人中19人とほぼ全ての子が○をつけてくれた。次いで「うれしい」が6人、「あんしん」が2人など、ちりゅっ子かふえにポジティブな印象を持ってあげることが分かった。「きんちょう」と「しんばい」には各1人ずつが○をつけている。

第4回（調査数24人）

質問 すきな食べものはなんですか？（自由記述、複数回答可）

いちご	5
ぶどう	1
スパゲッティ	1
ごはん	2
おかしなんでも	2
チョコレート	1
カレー	4
ラーメン	1
やきそば	1
ジュース	3
チーズ牛丼	1
ガム	2
たまご	2
あめ	5
まめ	1
健康にいいもの	1
みそしる	1

この質問は、フードパントリーで配るものの参考にするために行った。私たちも普段から食べるような日本で一般的な食べ物ばかりという結果になった。第1回のアンケートで、学校の給食を食べている子が多いということからも分かる通り、日本の食生活に馴染んでいると感じた。

第2節 第1節の結果のまとめ

参加するのは何回目ですかという質問で、アンケートを行った3回全てで「1回目」だと答える人が多かった。1回目と答えた子の合計は40人であり、単純に計算すると40人の子どもが1回以上来てくれたということになる。知立団地にある知立東小学校の全校児童は令和3年度で305人である。令和元年度の情報によると、全校生徒308人中68.8%の212人が日本語指導が必要な外国籍の児童だ。そのため、現在も200人以上の外国籍の子どもが学区内で生活していると予想される。そう考えると、ちりゅっ子かふえに来ているのは知立団地に住む外国籍の小学生の約20%であるということが分かった。

そしてちりゅっ子かふえを知ったきっかけは、保護者やOne day One lifeのクミコさんからが多くを占めていた。そのため、子どもたちに情報を伝える大人の存在が重要だと感じた。直接伝えるだけではなく、SNSを利用した宣伝でより多くの大人の目に留まることで、支援が必要な子どものもとに情報が届けることができる。

また、文化や思想の理由から食べられないものがある子はおらず、私たち日本人と同じ食文化で生活している子が多いのだと分かった。子ども食堂で外国につながる子どもたちを対象にするときも、日本の食文化で献立を立てられるため、外国につながる子どもと日本人の子どものどちらともを対象にすることが可能だと感じた。

これらの結果から、外国につながる子どもたちに対して子ども食堂を開催するとき、子ども食堂のこと教えてくれる大人の存在が重要であり、大人同士での宣伝であればSNSの利用が有効だと分かった。食事についてはアレルギーへの配慮は必要なものの、現在多くの子ども食堂で提供されているものを外国につながる子どもにも提供できることが分かった。

第3節 西町公民館のフードパントリーでのアンケート

続いて、西町公民館のフードパントリーを考察する。

質問1 ちりゅっ子かふえに来るのは何回目ですか？

はじめて	9
2～10回目	47
11回以上	9
総計	65

西町公民館で開催するちりゅっ子かふえはに来る子どもは、ほとんどが日本人の子どもである。一番多いのは2～10回目の子どもで47人、初めての子どものと11回以上来ている子どもが共に9人であった。この1年のうちに来るようになった子どもが最も多く、1年以上来てくれている子どもは全体の14%であった。2020年3月26日より子ども食堂を中止し現在のようなフードパントリーをおこなっているが、開催の度に参加人数が増加していることから、この結果は予想できる。

質問2 ちりゅっ子かふえに来るときの「きもち」を教えてください。

たのしい	50
かなしい	1
いやだ	0
あんしん	15
つまらない	2
きんちょう	8
うれしい	53
しんばい	0

「うれしい」が最も多く53人、次いで「たのしい」が50人と、こちらも知立団地での結果と同様にポジティブな意見に多くの票が集まった。そのあとに「あんしん」、「きんちょう」と続く。

第4節 知立団地と西町公民館の比較

まず参加するのが初めてという子どもの割合について、知立団地では毎回半数以上が初めて参加する子どもであるのに対し、西町公民館では全体の14%であった。西町公民館はフードパントリーを過去20回以上開催しているため、若干増え続けて入るもののある程度来てくれる子どもが固定されつつある一方で、知立団地で開催したのはまだ10回未満であるため、知立団地に住む子どもたちの間で広まっている最中なのではないかと考えられる。

そして、ちりゅっ子かふえに来るときの気持ちについて、どちらに参加する子どももポジティブな気持ちを持ってきていた。しかし細かく見ると、西町公民館では知立団地よりもあんしんに○をつけた割合が高い。あんしんに○をつけた子は、参加回数が初めての子9人中1人で11%、2～10回目の子47人中10人で21%、11回以上の子9人中4人で44%であり、参加回数別のあんしんの割合は11回以上と答えた子が最も高かった。長期間参加してくれている子のほうが、安心すると感じているという結果になった。一方で、知立団地であんしんに○をつけた子は、初めて参加する子と3回目の子の2人だけであった。3回目の子は3人だったため、3人中1人と考えると33%が安心すると答えてくれていることになるが、調査数が少ないためさらなる調査が必要だ。

第五章 One day One life のスタッフへのインタビュー

第1節 第四章のアンケート結果は正しいのか

One day One life で活動するスタッフの方々にインタビューをさせていただいた。まずは、知立団地で子どもたちに向けて行ったアンケート調査の結果について、改めてお聞きした。その結果、アンケート結果とスタッフの方々が認識している知立団地の住民の生活の様子は一致していることが分かった。知立団地のフードパントリーの宣伝方法は、One day One life のクミコさんのFacebookが主であり、保護者などの大人から子どもたちに情報が伝わっている。食文化についても、地域の公立学校に通っており給食を食べているため、日本の食文化に慣れている子が多いと話していた。

また、知立団地のパントリーの際に、少しだけ余ってしまった端数の食品やお米を One day One life の事務所に置いている。この食品は One day One life のスタッフの方々に適宜子どもに配ってもらうためのものである。配り方は、ある程度数が集まっていればパントリーの時のように Facebook 等を通じて子どもたちに呼びかけて配り、他にはスタートアイズに相談に来た人で食品が必要だと感じた人には個別で渡しているようだ。貧困家庭への食料支援を目的にした場合、それなりの高い頻度での活動は必要になるのだと感じた。

第2節 知立団地に住む外国にルーツを持つ住民の現状

続いて、知立団地の状況について伺った。クミコさんは14年前から日本で外国人支援の活動を行っている。活動を始めた当時は団地が汚かったようだ。そこで住民の外国人たちに日本の生活に合わせたマナーや文化を教えて日本人と共生できるよう活動した。その結果、現在では知立団地は抽選で入居するほど人気の高い、住みやすい団地になったようだ。

知立団地の住民で最も割合が高いのは、ブラジルにルーツを持つ住民である。しかし近年は他の国にルーツを持つ住民も増えているようだ。特にペルーやベトナムにルーツを持つ住民が増えている。クミコさんは、20年ほど前知立団地にブラジルから来た人が増えていったように、これからペルーやベトナムの人も増えていくのだろうとお話していた。しかし、現在の知立団地では日本語以外にはポルトガル語にしか対応していないことも多く、ブラジル系の住民以外への支援が行き届きにくい。現に知立団地のフードパントリーでも、ポルトガル語の案内が主なため、来たのはほとんどブラジルにルーツを持つ住民という日もあった。また、住民は日本に定住していても母国が同じ人同士、つまりブラジル人同士やベトナム人同士で結婚することが多い。それは、言語の問題から、母語が同じ人同士でないとコミュニケーションが取りづらいからである。このように言語は社会の中で生活するために非常に重要であり、日本で暮らす日本人と日本で暮らす外国にルーツを持つ人々が、同じ社会で共に生きようとするときに、大きな壁となる。

知立団地でフードパントリーをおこなうようになったのは、2021年になってからである。新型コロナウイルスの影響に関係なく、コロナ禍以前もコロナ禍になってからも食料や物資が足りておらず、いつも困っている状況だったようだ。その中でちりゅっ子かふえが知立団地で始める前に別の団体が1度だけ簡易的に初めてのフードパントリーを開催した。その後、ちりゅっ子かふえの栗田さんが共通の知り合いを通じてクミコさんと連絡をとり、フードパントリーが始まった。

第3節 クミコさんが知立団地の子どもたちに対して思うこと

長年知立団地で外国人支援を続けるクミコさんは、是非子どもたちの将来の夢を聞いてほしいとおっしゃっていた。外国人労働者の現状として低賃金や危険な仕事をせざる負えない状況の人が多く、実際に、知立団地に住む多くの外国にルーツを持つ住民は、自動車関係の工場働いている。他にも、シングル親世帯が多いことも現状としてある。このように多くの家庭の経済状況は良いとは言えず、ぎりぎりの生活をしている家庭も少なくない。また、子どもたちもアルバイトや工場勤務の親・兄弟をロールモデルにしまい貧困の連鎖が続いてしまっている。その中で子どもたちの将来の夢を聞いてほしい理由は、子どもたちには働く国もその職業も多くの選択肢があるはずだからだ。私はこの話を聞き、子どもたちと夢について話をするすることで、私たちも外国につながる子どもたち自身も「外国人労働者」とい

うイメージにとらわれずに将来のことを考えられるようになってほしいという意味なのではないかと受け取った。

また、本稿の第一章で記述した外国につながる子どもの先行研究で学んだ、低学歴の連鎖についてもお聞きした。まず、外国につながる子どもたちにとって今何が最も必要と考えているのかお聞きしたところ、1番に教育、2番に食事だと話していた。なぜ食事よりも教育が大事だと考えているのかというと、勉強ができれば将来道を外れたり困ることが少なくなるからだ。現在、知立団地の子どもたちが通う知立東小学校は全校生徒の約7割が外国につながる子どもである。そのため日本語支援クラスがあり、子どもたちは日本語を学ぶことができる。しかし、コミュニケーションのための日本語でさえ2年、日本で勉強しキャリアを積んでいくための日本語は習得するのに7年かかるといわれている。にもかかわらず支援クラス以外では日本語が不十分なまま日本人の児童と同じ教育を受けることになり、授業についていくことが難しくなる。

実際に知立団地の子どもたちは、中学校を卒業したら社会に出て働きたいという子が多いという。その根底には、「学校が面白くない」という理由があるのだそうだ。日本語が不十分なまま授業を受け続け、わからないことがどんどん増えていき、授業についていけなくなってしまう。また、保護者が育った国の教育と日本の教育のカリキュラムが異なり、家で保護者が教えたくても教えられない状況にもなっている。そのため子どもたちは授業についていけなくなり、勉強もできないし学校も面白くないから早く社会に出て働きたいと考えるのだそうだ。

ここに、第一章でも述べた2つの課題がある。日本語を習得するための受け皿がないことと、周りの大人たちも進学のための情報を持っていないことだ。知立東小学校にも日本語支援クラスはあるが、すべての授業に対応しているわけではない。また、周りの大人たちは日本式の教育を受けておらず、子どもに勉強を教えることができなかつたり、進学の方法を知らずに低所得の労働者階級が連鎖してしまう。子どもたちが一番理解しやすい言語での教育やキャリア支援が最も有効であるが、団地住民の多国籍化が進む中では多言語対応の壁は厚く、今後の課題である。

第六章 ちりゅっ子かふえ運営者へのインタビュー

第1節 ちりゅっ子かふえ開催までの歩み

ちりゅっ子かふえを運営するスタッフの3名にもお話を聞かせていただいた。まず、西町公民館でりゅっこかふえを始めた目的は、みんなで温かいご飯を食べる日を作ることだ。一人で過ごしていたり、一人でご飯を食べたりしている子どもや大人が、見えていないだけいるかもしれないのであれば、月に一度でもみんなで温かいご飯を食べる日を作ろうと思いはじめたそうだ。運営はもともと食育ボランティアで知り合ったメンバーで構成されている。子ども食堂の「居場所」の役割を目的に活動しているが、「子ども食堂は貧困の子どもにご飯を食べさせるところ」というイメージには悩まされたそうだ。ちりゅっ子かふえはそういった特別な所ではなく、「地域のコミュニティづくりの場所」を目指し、「誰でも行っていい場所」であることを理解してもらうことが課題であった。そのため、知立市内で勉強会や講演会、お披露目会をすることで、地域の人々に来てもらえるようアピールをした。

子ども食堂について議論する際に、誰でも行っていい、対象者は限定されていないという

子ども食堂は、食品をばらまいているだけだという意見がある。しかし、こういった「誰でも来て」の子ども食堂は恥の意識やスティグマに対処できるという利点がある。愛知県豊田市の保見団地でフードパントリーをおこなう「ほみプロジェクト」は、七夕祭りやエコ活動に参加するという枠組みにしている。なぜなら、困窮者向けの食料は近所の目が気になって受け取れない人もいるためである。(鈴木, 2021) ほみプロジェクトは、食料をもらうこと以外に目的を持たせることで、恥の感覚やスティグマを気にせずに、食料が欲しい人のもとへ届けることができている。

別の目的を持たせるという点では、ちりゅっ子かふえも同じ方法を使って「貧困支援ではない」「誰でも来て良い」というイメージを持たせようとしていると考えられる。例えば、コロナ禍前の子ども食堂で開催していた折り紙やレジンの体験教室やビンゴ大会だ。食事をするだけではなく、食事の前から友達ときて遊んだり、食事の後にみんなでビンゴ大会をして盛り上がっていた。コロナ禍でフードパントリーになってからはそういったみんなで楽しむイベントは開催できていないが、くじ引きを用意したりバルーンアートの団体に来ていただいたり、食品以外で子どもが楽しめるものを用意している。

また、ちりゅっ子かふえを立ち上げる際には、愛知県内の子ども食堂へ相談に行ったり、使っていない食器をいただいたりしたそうだ。協賛企業についても運営メンバーが直接活動の説明に足を運んだり、多方面へのつながりを形成した。しかし必要なものすべてがそろっていたわけではない。各家庭で使っている炊飯器を持ち寄り、何台も使用してご飯を炊かなければならないなど、物が足りていなかったそうだ。現在は、子ども食堂へ食料や物資の寄付を仲介する団体4つのメーリングリストに登録しており、様々な寄付の情報が得られる体制をとっている。このような寄付したい団体や人と子ども食堂を繋ぐ役割の団体が出てきたことも、ここ数年で子ども食堂が発展していることに影響していると感じた。

献立については、基本的に寄付していただいた食品を基に考えているそうだ。お弁当の時は色合いにも気を配り、アレルギー食材は必ず表示している。また、コロナ禍前の子ども食堂の頃はその場でよそってもらうシステムだったため、アレルギーのあるものを抜いて対応していた。そのため、本稿第5章のアンケート結果にあるアレルギーのある子どもも、アレルギーに対応していることが分かれば安心して来れるだろう。

第3節 フードパントリーで感じている役割

続いて、コロナ禍によって子ども食堂からフードパントリーの活動に変化させたことについてお聞きした。ちりゅっ子かふえは一緒に温かいご飯を食べることを目的としている。そのため、一緒にご飯を食べることのできないフードパントリーの形は本来の目的とは違う。コロナ禍前のような一緒にご飯を食べる子ども食堂に戻りたいか聞くと、運営の3名全員が戻りたいと答えた。しかし、食品等の寄付の連絡は変わらず事務局に届く。子どもの喜びそうなものばかり届くし、賞味期限の近いものもあるためフードロスの削減に協力できる。これらのものを子どもたちがもらうことで、ひと時でも楽しい・嬉しいと思って過ごしてくれたら満足だと語っていた。

また、ちりゅっ子かふえのことを忘れられないためにも何か活動を続けたいと思ったとも話していた。コロナ禍でフードパントリーになってから、嬉しいことに食堂の頃に比べてかなり来る人が多くなった。本稿第四章のアンケート結果からも分かるように、ここ1年の間で来てくれるようになった子どもが多い。このことについて、それだけ多くの人たちに活動

を知っていただくことができたのだと嬉しく思うと話していた。そのため、用意するお弁当などの数は増えて行っているが、増やせる数には限りがある。寄付の量や材料費、スタッフの体力を考慮すると、現在のお弁当 160 個・子ども用お菓子 100 個が限界だと言う。完全に草の根の活動で始まったちりゅっ子かふえが、160 人分のお昼ご飯を用意している現状は、決して容易にできていることではない。子どもに渡すのを優先するために、お弁当を渡すのを断りした保護者の方や、子どもであっても 100 人を超えてしまい渡せなかったことが何度もある。来てくれる人のためなら用意する数を増やしたいが、現実的に考えると難しいのが現状のようだ。

また、コロナ情勢の様子を見て子ども食堂の形に戻すことも検討しているそうだ。もちろん感染対策は徹底するため、コロナ禍前のようにビンゴ大会をしたり遊んだりということは難しいかもしれない。だが、本来の目的である「一緒にご飯を食べる」ことがしたいと話していた。しかし、現在フードパントリーには子どもだけで 100 人前後が来てくれる。コロナ禍前の子どもの食堂では、子どもは 40～60 人程度だった。子ども食堂を開催するとなると、さらに食べる場所も用意しなければならない。来てくれる子どもが増えることは喜ばしいことだが、食料支援・居場所支援をどこまで非営利で民間の団体が担うのかについては今後の課題である。

第 4 節 知立団地のフードパントリーも誰でも来てほしい

そして知立団地で始めたフードパントリーについてもお聞きした。知立団地では、元々何か活動したいと考えていたそうだ。そこで One day One life のミウラクミコさんと共通の知人を介して連絡を取り合い、フードパントリーを開催し始めた。来てくれるのは既述のとおり外国につながる子どもとその保護者ばかりである。そのため、開催場所によって対象にしている子どもを分けているのかと考えていた。しかしそうではなく、「国籍に関わらずどなたでも、今生活がちょっと大変というご家庭に少しでもお役に立てれば」とお話していた。実際に西町公民館のフードパントリーに知立団地から外国にルーツを持つ家族が来ており、また知立団地のフードパントリーでも日本人の子どもが来たらいつも通り渡すとお話していた。開催場所の地域の特性上、来やすい子どもの国籍が分けられてしまっているが、ちりゅっ子かふえとしてはどっちの活動にどんな子が来ても渡すということだ。

ただ、知立団地のフードパントリーには外国の文化で育つ子どもが多いため、One day One life のスタッフの方に支援していただいた食品の中から口に合うもの合わないものをアドバイスしていただき、配るものを決めているそうだ。また、西町公民館のフードパントリーではお弁当を配っているため、お米の支援があるときはなるべく知立団地のフードパントリーで配っている。お菓子については、西町公民館のフードパントリーは 100 個同じものを用意しなければならないため、端数で残ったものが出てきてしまう。そういったものを知立団地のフードパントリーで配れるのは良いと話していた。今後も、現在の 2 か所での活動形態を変えることはなく、知立団地では One day One life のスタッフの方々と協力して活動していくそうだ。

知立団地には生活に困っている人が存在し、その人を支援するために活動している。それならば来てほしい人を限定して開催したほうが良いのではないかと考えることもできるが、ここにも恥の感覚やスティグマとの関係がある。特に、日本の中の外国人コミュニティという点が大きく関係している。それは、ホスト社会からある集団へのスティグマ化は、そのコ

コミュニティ内部における相互不信を生み、コミュニティの一体感を崩すということである。日本社会からの福祉受給へのスティグマやヘイトのまなざしが、コミュニティ内部の人を「はずるい人」とまなざすように仕向ける。(鈴木, 2021) その結果、支援を受け取りたくても「私はずるい人ではない」と考えてしまい、受け取りづらい状況を作ってしまう。そのような状況を打破することができるのは「貧困支援として配っていない」フードパントリー、つまり誰でも貰いに来て良いフードパントリーであり、現在の知立団地のフードパントリーは最も適した形なのではないかと考える。

第七章 これからの子ども食堂と、外国につながる子どもたちの暮らし

西町公民館のフードパントリーと知立団地のフードパントリーを比較して、それぞれ次のような特徴が明らかになった。それは、利用者を集める際の違いである。新たに子ども食堂を開設したいという人がいる場合、地域の人々に知ってもらうために宣伝をしなければならない。その際に、対象者を制限しない子ども食堂であれば地域の掲示板など目につく場所にポスターを貼ることで、利用者を集めることができる。一方で、対象者を制限したい場合は宣伝が難しくなる。なぜなら、地域の各家庭の子どもの状況について把握する必要があるからだ。そのため、家庭の状況を知っている行政や団体などと協力して情報を集めるか、自らが情報を得ることのできる立場にある必要がある。ほかにも、来てほしい子どもにだけ宣伝するためには、そのためのツールや伝達網が必要だ。

こういったことから、制限をしない子ども食堂は多くの子どもたちが気軽に来ることができ、イベントとして楽しむことができるが、貧困支援としては機能しにくい。そして対象者を制限する子ども食堂は「伝手」がないと来てもらうことはできないが、貧困支援に注力して活動することができる。

知立団地のフードパントリーでは、制限をしているわけではないが、来てほしい家庭には直接連絡できていた。それは、日頃から知立団地内で外国人の就労支援をはじめ様々な相談にのっているからであり、その中で家庭の情報やつながりを得ることができたからだ。また、西町公民館で子ども食堂を始めるときには、初めに多方面とつながりを作っていた。そのため、どちらのタイプであっても子ども食堂を開催するときに重要なのは「外とのつながり」であると感じた。

しかし、現在はフードパントリーの形で落ち着いているが、今後子ども食堂ができるようになったときにどうなるかについては課題が残る。西町公民館では知名度が上がり来てくれる人がかなり増えた分、コロナ禍前と同じ方法では開催は難しいように感じる。大人数に対応できる場所や、利用時間のルール作りなども検討しなければならないかもしれない。規模が大きくなりすぎたら、草の根活動でカバーしきれない活動になってしまう。また、フードパントリーの形でしか開催したことのない知立団地では、どのような形で開催することができるのか。他にも多くの課題が残る。

特に知立団地については、月に1度の食料支援だけではカバーしきれないような事情を持つ家庭の話聞くこともあった。その場合は、スタートアイズで把握していれば個別で連絡を取り、あるいは、別の日に食料を渡しているようだ。しかし、6000人以上が暮らす知立団地全ての家庭を把握することは、草の根活動や一般企業にはかなり難しい。活動中に子どもたちの生活の様子を聞くと、自分たちの活動では力不足に感じることもあった。

子ども食堂はコロナ禍で注目を集めた活動ともいえるため、コロナ禍が終わったら人々の注目はどうなるのであろうか。「『失業者があふれたときは、むしろ、みな注目してくれるんです。しかし、窮状が可視化されなくなったら、また、関心が薄れてしまう。結局、日本社会の中で、ブラジル人も、元の“ガイジン”に戻ってしまう。いや、戻らされてしまうのかな。』」（2021, 安田）これは2008年のリーマンショック時を振り返ったときの言葉だが、現在のコロナ禍にも置き換えることができる。コロナ禍で子ども食堂や失業してしまった外国にルーツを持つ人々への支援に話題が集まっているが、コロナ禍が終わったら別の話題に社会の関心が移り、支援の手も減ってしまうことが懸念される。

しかし、コロナ禍で子ども食堂が注目された今こそ、日本社会が外国につながる子どもとその家族にも目を向けるチャンスでもある。日本の経済発展が引き起こした問題として、社会全体が向き合うべきではないだろうか。いつになるかわからないが、コロナ禍が過ぎ去ったら、「子ども食堂ブーム」ともいえるこの状況が終わるときが来るかもしれない。そうなったとしても、外国につながる子どもたちの置かれる状況に向き合い、手を差し伸べられる社会を模索するべきではないだろうか。

日本社会と子ども食堂には多くの課題が残るが、今後も多くの子どもたちが笑顔になれる場所として、子ども食堂が愛され続けることを願う。

参考文献

- 鈴木江理子（2021）『アンダーコロナの移民たち—日本社会の脆弱性があらわれた場所』明石書店
- 安田浩一（2019）『団地と移民 課題最先端「空間」の闘い』角川書店
- 大江道雅、毎日新聞取材班（2020）『にほんでいきる—外国からきた子どもたち』明石書店
- 小島祥美（2021）『Q&A で分かる外国につながる子どもの就学支援』明石書店
- 小島祥美（2016）『外国人の就学と不就労—社会で「見えない」子どもたち—』大阪大学出版会
- 荒牧重人、榎井縁、江原裕美、小島祥美、志水宏吉、南野奈津子、宮島喬、山野良一（2017）『外国人の子ども白書—権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から』明石書店
- 三浦綾希子（2015）『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ』勁草書房
- 新保幸男「新型コロナウイルス感染症流行下における子ども食堂の運営実態の把握とその効果の検証のための研究」（<https://www.mhlw.go.jp/content/000800261.pdf>），閲覧日：2021年7月24日
- 出入国在留管理庁「在留外国人統計」（http://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html），閲覧日：2021年7月25日
- 知立市ホームページ「『昭和未来会議』について」（<http://www.city.chiryu.aichi.jp/i/topics/1466560564538.html>），閲覧日：2021年12月14日
- 知立市ホームページ「令和3年度 小中学校の児童生徒数及び学級数（4月1日現在）」（<https://www.city.chiryu.aichi.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/26/R3seitosu.pdf>），閲覧日：2021年12月14日
- 朝日新聞デジタル「新入生49人のうち41人が外国籍 愛知の小学校」（<https://www.google.co.jp/amp/s/www.asahi.com/amp/articles/ASM2L5DGLM2LOBJB007.html>），

閲覧日：2021年12月14日

ちりゅっ子かふえ magocoro Facebook, 閲覧日：2022年1月5日

【謝辞】

本稿を作成するにあたり、多くの方にご支援いただきました。2年半の間ボランティアとして活動に参加させていただき、今回のインタビューにもご協力いただいたちりゅっ子かふえの関係者の皆様、お忙しい中インタビューにご協力いただき、子どもたちへのアンケートもお手伝いしていただいた合同会社スタートアイズの皆様には深く御礼申し上げます。そして、成ゼミの同級生、指導教授、共にボランティアとして活動していただいた方々に、この場を借りて改めて深く感謝いたします。